

調布市の事故検証結果報告書より

調布市立学校児童死亡事故検証結果報告書（平成25年3月）

平成24年12月20日 調布市立富士見台小学校5年2組 Sさん

- 小児喘息があり牛乳・乳製品、ピーナツアレルギーあり、除去食を提供
- 年度初めに管理指導表を基に、校長、担任、養護教諭、保護者、栄養士等で面談し、対応の方針を検討
- 毎月の内容は、献立表や調理室手配表を基に、栄養士と保護者で面談または書面により献立ごとに除去すべき食品を確認
※12月分も、11月26日栄養士、チーフ調理員、母親が打合せ
- ランドセルにエピペン1本、吸入器1台を常時携帯

- 12:17 チーフ調理員からSさん専用の給食がのった黄色いトレイを直接手渡したが、どのように伝えたかは正確には記憶していない。
- 12:45 日直が「おかわりどうぞ」と声をかけた。じゃがいものチヂミは4枚残っていた。担任は、チヂミを4つに分け、計16個に分けられたチヂミを教室内を配って歩いた。
- 12:50 Sさんから「欲しいです」と声がかかった。
担任は、「これ大丈夫か？」と声をかけた。
Sさんは、「これを見ればわかる」と言って机の道具箱に入れてあった連絡袋の中から、念のために母親から渡されている「チェック表」を取り出した。
担任は、Sさんと一緒に、チェック表内の「じゃがいものチヂミ」の欄にピンクのマーカーが引かれていないのを確認した。

13:22 掃除のため教室後方に移動した自分の席に座っていたSさんから、「先生、気持ちが悪い」との訴えがあった。→**食べて32分後**

Sさんは、持参している喘息用の吸入器を使い、吸入をしていた。

担任は、「大丈夫か？保健室に行くか？」と声をかけた。

Sさんは「大丈夫」と答えた。

13:24 担任は、Sさんの顔が紅潮しており、呼吸が苦しそうで、いつもの具合が悪いときの状態よりつらそうであったので、そばにいたD君に、「養護教諭を呼んできて」と依頼した。

担任は、食物アレルギーの可能性を考え、エピペンを打つことを考えた。

ランドセルからエピペンを取り出した。

担任は、「これ、打つのか？」とSさんに尋ねた。

Sさんは、「違う、打たないで」と答えたため、担任はエピペンを打つのをやめた。

13:28 養護教諭到着

～ Sさんは、自分で吸入器を口に当てていた。息が苦しそうでうまくできて

13:30 いなかった様子を見た養護教諭は、救急車の要請が必要と判断
担任が救急車を要請するために離れた。

職員室で校長が救急車要請を指示した。

13:31 母親に連絡 チーズ入りチヂミを食べたことを伝える。

エピペンを打ったか聞かれた。

G教諭がエピペンがどこにあるか聞きにくる。

母親から電話でエピペンを打つように求められた。

養護教諭がSさんが「トイレに行きたい」と言ったのでおんぶでトイレに連れて行った。

便器に座らせたが呼んでも返事をしなかった。

→食べてから41分後、 症状発現から9分後

- 13:31 校長は、救急車の受け入れ準備のため1階へその後3階へ
スクールサポーターが現場へ行く。
養護教諭がスクールサポーターにAEDを持ってくるように指示
- 13:35 Sさんは便座に座り後方にもたれかかるように座っていた。
呼吸無し、脈は触知せず、顔面蒼白はであった。
- 13:36 校長がエピペンを注射した。（1回目は針が刺さらず、再度試み、打った）→**症状発現から14分**
AED用意、「通電の必要なし」のメッセージが流れる。
- 13:40 救急車が到着(10分で到着)。
- 14:12 杏林大学到着。
- 16:29 死亡確認。

調布市食物アレルギー事故再発防止検討委員会に 亡くなられた女の子のご両親から寄せられたメッセージ

委員の皆様へ

娘の命はたった11年という短いものでしたが、家族、親族、地域の方々にこれ以上ないほど愛され、周囲の慈しみの中で輝いて生き抜いた人生だったように思います。

食物アレルギーや喘息という負担を抱えてはいたものの、その事実を前向きに捉えて、そのことによってむしろ豊かな感性や注意深い観察力を育んだとさえ思っています。見るもの触れるもの全てに敏感な、思慮深いところのある子どもでした。日々を謳歌し、ひたすら一生懸命に、明るく楽しんで生きていました。

そして将来は、自分の経験を生かして、子どもが助かるような研究をする科学者になりたいと、大きな夢を持って未来を目指していました。国や医学界、教育現場、行政の皆様には、この死を無駄にせず、多くのアレルギーを持つ子どもやその保護者の安心につながるような確実な施策を作り上げて、未来に向いていた娘の思いに応えてほしいと思っています。

2013年4月10日
両親より